

庄内協同ファームだより

No.140 2012年8月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com



東北の江ノ島と言われる 庄内浜 由良海岸の白山島
(快水浴場 百選にも選ばれました)

昨年続き今年もまた農業施設に、我が家にとつては甚大な被害が起きた年である。ハウス2棟が壊れて、今年はヒトハウスがやぶれ骨パイプが痛んでしまった。その修復に10日位かかり、すっかり農作業の方が遅れてしまった。4月2日の突風被害である。我が村の公民館の記念の松の木(樹齢40年〜50年位)が倒され、幸いにも建物には影響はなかったものの、電話線、電線が切断され、両方二日不通の状況であった。神社境内の杉の木、これも樹齢50年位のもので8〜9本根本から折れてあわや民家に倒れる寸前で止まっている状況であったのはハラハラドキドキであった。

こうして見ると今の気象の状況は昔では考えられなかった。大雪・大雨・大風といったものは当り前に災害としていつ起きてもおかしくない。地球全体がその様な気象になってしまっているのかも知れない。

そんな中で、自分自身これからも農業経営を続けて行くこう、又後継者に農業をやれなどと本当に大丈夫なのだろうか、有機栽培、特別栽培とやっけてはきているが、不安なところがありすぎる。今までもそうであったが、色々ナリスクを背負いながらの農業であることは間違いはないと思うが、これが自分一人であつたら止めていたかも知れないと思う。たぶん……近くに仲間がいたから、又はげましてくれた先輩がいたから続けてこれたと、改めてありがたうと心から言いたいし、又これからもよろしくお願いいたしますと言いたい。

ある時誰かこんなことを言ったのを覚えている。「仲間と話したり、又色々な交流会に参加して各地方の人と話したり、生協の人々とふれあつたり、そんな経験を積み重ねて何年にもなると自然と、何となく今自分が何をやればいいのか、先が見えてくる様な気がする。やつてゐることは間違いないのだと確信がもてる。」という様なことを聞いたことがあるが、自分にはまだまだその実感が無い。

今思うのは、今年から息子が農業をやりはじめて一緒に働いている事実と、継続してゆかなければならない現実が目の前にあることの重さ。一歩一歩進むしかないのかなと、あせらずゆくりとたまには立ち止まって腰を伸ばし、たまには木の上のぼつて遠くを見るのも気持ちがいいものである。そんな人間はそこのけで、それなりに稲は毎日毎日成長を続けていくくれる。

中村 公明

6月7日は、お取引先で各種様々の行事が行なわれます。生協の生産者を中心とした、生産者、業者の総会。お米生産者の各地区のブロック会議、食品会社の会議等など!!。

「東北、北海道ブロック会議」報告 五十嵐 良一



震災後1年4ヶ月、被災地である宮城県みどりの農業協同組合さんの受入により、取引先生協の生消協、東北、北海道ブロックの集会がありました。17の生産地と生協関係者、百余名が集い、被災地の状況、その後の復興の取り組み等の報告、そして東北、北海道の農民として、消費者として、どう受け止め、どう展望を見いだすかが話し合われました。

美里町の佐々木町長、大坪JA組合長も、物心両面の支援により除々にとりもどしつつあるとの、あいさつがありました。それでも車での高速道路から見る水田圃場は、植え付けされた緑の部分と被害に遭い作付されない圃場は草さえも枯れ茶色で、それが果てしなく広がっているように見えました。稲作農家の私には、本当にやり切れない感じがしました。

二日目の現地の視察でも、地盤沈下し水没した道路、圃場、賑やかだったという海水浴場の何もない風景、未だに墓地の墓石が倒れている様は辛い思いばかりがつのりました。

JAでは、施設、設備、保管米の被害、そして原発事故による放射能、土壤汚染対策として、玄米すべて不検出であるが、400ha余りの圃場に、塩化加里、鶏糞燃焼灰を散布し、セシウム吸収を抑えているとの事。又、飼料の高騰に加え、肉牛価格の低迷は、風評被害であると。

畜産農家の被害と対応は全く想像出来なかった状況をお聞きしました。宮城、岩手、そして福島と3ヶ所で、採卵鶏を飼育している花兄園(かけいえん)は福島第一原発から1.8kmの農場では、11万羽の鶏と採卵した卵5トンを放置したままで、鶏は餓死しているだろうし農

場には戻れず放棄する覚悟でした。余りにも不条理さを感じました。しかし餌不足、電力不足等、不安を抱えながらも、食べる人達からの支援で再開への努力が続いているという事です。

ポークランドグループの豊下社長からは、養豚の餌不足の対応の中で、飼料米による、餌やりの工夫の中でも、子豚の流産やとも食い、栄養失調、そして電力不足による、暑さへの不安の中で耕畜連携を目指し、地域の雇用の確保の為に努力を続けたいとの報告でした。豚に対する愛情、養豚にかかる思いの深さが、胸をしめつけました。

翌日は、イーストファーム阿部さんの有機栽培圃場の視察でした。有機栽培(ササニシキ等)36haを行っているとの事。16haの連反圃場は、雑草も無く、生育も旺盛で、慣行栽培以上と思える程でした。本当に農民の生産者力と、心意気を感じる事が出来た2日間でした。

生き方を考えたい、幸せというもので考えたい。また、逆に励まされる絆を求めたいとのまとめがあり、心にしみました。



商
品
紹
介

もうすぐ夏
だだちゃ豆の出荷はもうすぐだ!!

今年の大雪の影響で少し遅れてのスタートでした。だだちゃ豆の定植も6月にはほとんど終え、早生甘露、庄内1号などは8月前に収穫が始まるものもあります。春の台風並の風は被害がたくさんでした。ビニールハウスの倒壊やビニールの剥離被害などはほとんどの人が受けました。仕事を始めようとした春先の被害は農家にはとても厳しいものでしたが、植えつけられただだちゃ豆はネキリムシにやられながらもその後順調に生育し、梅雨の雨にも助けられて、生育はすこぶる順調であります。ここ2、3年は天気に恵まれなかったこともあり作柄もあまり良くありませんでした。今年こそはという生産者農家の思いも加わって、今のところ収量も味もいいんじゃないかと微かに期待をしているところでございます。後2週間後には最初のだだちゃ豆をお届けできるかと期待をしておりますので是非食べてみてください。

だだちゃ豆生産者 佐藤清夫



庄内協同ファーム 有機JAS会議

事務局 今野 昭史

去る7月10日に2012年改正による有機JAS研修が行われました。当日は該当者53名中47名が参加・受講しました。

庄内協同ファームの有機認定をしている登録認定機関の(株)アフラス認証センターより代表取締役渡邊義明氏を講師としてお招きし、早朝から夕方まで一日かけて研修を行いました。



有機JAS法は5年に1度改正があり、それに準じて有機農産物や有機加工食品の生産に携わる人が研修を受けて周知することになっております。



6月13日から15日に行われた(株)アフラス認証センターによる有機農産物監査から約1ヶ月での有機研修なので、有機を生産する上での基本的事項を再認識できたのではないのでしょうか。

翌11日は、新規の有機JAS農産物生産行程管理研修ということで、若手の後継者を含む6名が研修を受けました。今後の活躍が期待されます。

へんりりりり 徒然草

志藤知子



「おい。」裏口で夫の呼び声がする。行ってみると、

両手のひらの草の中に、ほのかに光るものが見える。蛍だ。今年はまだ蛍を見ていないと言った私に見せようと夕食後、カモ放飼田にトーチを点けに行つた帰り道、そと草に包んで持ち帰つてくれたのだ。風のない静かな夜に外に出てもなかなか目にするのが難しくなつた蛍に、今年もようやく会えた。振り返れば、春作業が始まつてから、この蛍の季節を迎える迄、次から次へ



と続く仕事を追いかけてながらよく頑張ってきたなと思つ。有機栽培を中心に据えた我が家の経営は、田畑の仕事に果樹と養豚が絡まつて、雨の日の仕事にも事欠かない。その間に自給畑を耕し家事を分担し、地域や組織の行事に参加し、趣味の会へもかかさず足を運ぶ。

余裕がないと言えばそれまでだが、あり余る仕事とやりたし事に困まれて充実した毎日、と強がつてもみる。時には押し寄せる疲労感に辟易とする事もあるけれど、ひとつの山を越える度に、小さな達成感や充足感を味わいながらここまで来た。今日の仕事の予定は有機栽培田のヒエ

取りと、枝豆の中耕だ。天気は晴れ強い日差しを受けながら今日も汗にまみれる一日になりそうだ。気持ちにも体にも負荷をかけなければ頑張れないような仕事を前にして、「無理をしないで頑張ろうね。」と、声をかけて圃場に足を踏み入れる。

庄内協同ファームの米検査について

米検査員の高橋直之です。

庄内協同ファームでは、3名の検査員がいて、それぞれ農家をしながら、ファームの生産者のお米(うるち米、もち米)の検査をしています。



ファームでは、ひとめぼれ、コシヒカリ、つや姫、ササニシキとでわのもち、この5つを主に検査しますが、この品種ごとの特性(早生や晩生といったもの、草丈があるもの、ないもの)はもちろんです。その年の天候(大雨、ゲリラ豪雨、フェーン現象、冷夏、台風、カメ虫大発生などの虫被害等)によるものが毎年変化するため、稲を育てると同様に検査業務も大変なものがあります。

梅雨明けのこの時期は、米部会と連携し、今年の生育状況や天候のことなど情報を共有したり、これから始まる検査に向けての連絡事項や提出する書類、検査計画の準備などを進めているところです。検査員同士の検査技術の向上はもちろん、円滑に検査を行える体制づくり、人的なニアミスや書類の不備などが無い様に取り組んでいきます。

あとがき



5月のある日の朝刊(全国紙)にふと目に止まった折り込みチラシがありました。八丈島産のアシタバ苗の販売広告です。育て方の説明欄に有機肥料を二握り程度使用との言葉にもつい惹かれ早々に5苗を注文しました。定植も終え2週間程した頃に、伊豆大島産のアシタバから国の規制値(100ベクレル)を越える放射性セシウムが検出されたとの報道がありました。風評被害地域は北関東、東北という納得のいかない世論みたいな雰囲気のある中で、実際は伊豆諸島にまであの目に見えない放射能が飛んでいたことに驚くと共に安全の確認も無いままに原発を稼働させるこの国の指導層には、全くもって理解ができません。同じ敗戦国のドイツ連邦環境大臣の言葉を借りれば、「原子力が現在人間の知恵で制御出来ない技術である以上、脱原発です」又元々は推進派だったメルケル首相さえ倫理委員会を開き、経済性やエネルギーの問題で捉えるのではなく倫理の問題として捉えたとの報道を目にしました。この言葉が非常に印象的でした。半減期数十年〜数十万年と言われる物質を後生に残す事は現代文明人の(おこり)ではないでしょうか。(尚、伊豆大島産のアシタバの出荷自粛は、既に解除されておりま

(好)